

人形の足跡として石膏が小さく落ちてゐる冬の部屋
野原亜莉子

人が寝静まった夜中に、人形が活動するとはよくある話。これもそういうイメーজだろうか。種明かしをすれば、石膏が落ちてゐるのは、人形をつくる過程で溶かした石膏が床に落ちたのだらうが、そこところはさり気なく流して、うまい。

網上の豚の破片に血が滲みまたひとつ喰う 知らない
かった「死」 佐佐木定綱

この一首だけを読むと、「死」はその席で話題になった誰かの死、あるいは豚の死と読める。ただ一首目の「五分二分」をキーワードにして読むと、「死」は「イスラム国」に殺害された後藤健二さんのことらしいと推測できる。「後藤健二さんを殺害したとみられる覆面男の正体が判明か。「イスラム国」の黒い覆面の男が……」という英BBCの動画が流れたのが、二月一日午前五時過ぎだったからである。とすると、上句が一举にシンボリックかつ不気味な色合いをおびる。付かず離れずの微妙な距離の取り方に注目。

いいあんべにできたおじいの歌、踊り、趣向を酒肴
となして泡盛 俵万智

歌って踊って泡盛といういかにも沖縄らしい情景を、雰囲気盛り上げるようにうたって楽しい一首にしている。「趣向」と「酒肴」の語呂合わせはさほど感心しないが、全体のリズムの軽さはこの作者らしい味。

短歌の現在

No.410 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

学校の水飲み場にはひつそりと縁から腐食してゐる
鏡 大塚泰子

小学校の水飲み場らしい。十個か十五個の蛇口が並んでいて、その上の壁に鏡がつけられている水飲み場を思い浮かべればいい。この作者の今月の作、保護者用下駄箱、木椅子、理科室のフラスコ、画鋲、剥製等、どれもディテールがきちっと表現されていて、なかなかの作。

ふたり子は出でて戻らず追儼豆撒いてしんと家の
からっぽ 佐々木寛子

去年までは豆まきのとき在宅していたのだ。親離れして行きつつある子を、親の側から表現して、「豆撒いてしんと家のからっぽ」という下句、的確。

紙箱の蓋をやりわり押し上げる名刺なべてはゆきず
りの人 中西由起子

そう、名刺を交換してその後一度も会うことがない人がほとんど、という思いは誰でもあり、共感する人がおおいだろう。そんな名刺は保管しておく必要はないはずなのだが、なんとなく捨てられずに箱にためてある。そんなささいな現実取材した取材感覚のよさ。

時差ゆえに出張先の夜の更けの電話口にて異動の内
示 武藤義哉

日本以外の国で深夜に、つまり非日常的な時空で職場の異動という日常の基底部が決まった内示を受けたというのだ。ちよつとした違和感をクローズアップした。夕光に金色を増す金閣寺雪の白きに冴えざえと佇つ